



黄金の犬  
西村寿行

〈著者紹介〉

昭和五年、香川県高松市生れ。漁師、運転手、業界紙記者、映画製作、飲み屋経営など二十近い職を転々とした後、昭和四十四年「犬鷲」がオール読物新人賞佳作となり、作家生活に入る。昭和五十年「君よ憤怒の河を流れ」が読書界に大反響をまきおこし、一躍脚光を浴びた。以後、冒険推理に新分野を拓き、他の追隨を許さぬ精力的な活動を続けている。「大笛」「蒼き海の伝説」「往きてまた還らず」「悪霊の棲む日々」「魔の牙」など著書多数。

## 黄金の犬

昭和五十三年二月十日 第一刷  
昭和五十四年十月一日 第十三刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 西村 寿行  
発行者 徳間 康快  
発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇  
電話東京(43)六二二二番代表  
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします)

目次

第一章	別離	3
第二章	海峡越え	29
第三章	三つ巴 <small>どろもえ</small>	52
第四章	暴行	88
第五章	死闘	108
第六章	河童伝説 <small>かっしや</small>	133
第七章	海と女	166
第八章	太平洋へ	190
第九章	武器輸出	226
第十章	攻撃	248



# 第一章 別離

## 1

その路は標津岳ヒツツに登っていた。

路とはいっても本物の路ではない。原野の中のけもの路のようなものである。前方に小高い標津岳がみえる。標高千六十一メートルである。左手にはシタバノボリ山がある。こっちはほうは六百三十メートルしかない。

雪が来る前の褐色にくすんだ雑木林があった。密生している雑木林ではない。北海道特有の閑散とした疎林である。薄汚れてみえる。

林に入ったところで、ゴロがピタと、足をとめた。ゴロは日本犬の雑種で、牡犬である。中型犬だ。狛犬であった。狼に似ていた。ほんとうならシェパードに似ているというのだろうが、ゴロの相貌や体軀からはシェパードは想像できなかつた。アラスカ狼に似ていた。双眸に青みがかかっているようにみえて、冷たかつた。太い尾が、巻尾でもなく差し尾でもなく、垂れていた。

その尾が、ゆっくり左右に揺れた。重くみえる動かしかたであった。跳躍にそなえた四肢に神経の張りつめるのがみえた。

「いたかー」



本田秋彦の押し殺した声が、ふるえた。

「どうやら……」

北守教重は、ライフルの安全装置を外した。ウエザビー・マークV、口径三〇・〇六、大物猟用ライフルである。強大な殺傷力を秘めているが、それでも北守は戦慄の走るのをおぼえた。不安なのだ。相手はふつうの獲物ではなかった。罾であった。罾の凶暴さはつとに知られている。撃ちそこねて反撃をくらえば、死はまぬかれない。その一撃は容易に馬の首の骨を折るといわれていた。

ウエザビー・マークVは五弾装填されている。自動銃ではない。ボルトアクションであった。そのたびにボルトを起こして弾を送らなければ、撃てない。ボルトアクションは自動銃よりは精度はあるが、ことにのぞんで冷静と練達を要する。

いわゆる、慣れが必要だ。北守にその慣れはなかった。ハンティングをやめて五年になる。その前は練達のハンターであったかといえ、そうでもない。要するにただの日曜ハンターに過ぎなかった。罾などに見参したことはただの一度もない。

ライフルを構えた体が硬くなっている。腕も腰も柔

軟さを失ってしまっていた。柔軟さがなくなると発射時の銃の反動を吸収できない。とうぜん一殺必中であるべき弾に、命中が期せなくなる。

それがわかつていて、体は石のように硬くなっていた。

ちらと、悔恨がかすめた。

北守は環境庁直属の森林警備官であった。守備地区は関東地区だった。東京の八王子に警備隊のオフィスがある。最近に設けられたセクションで、任務は国立公園内の森林監視と野生動物の保護であった。

北海道のここ標津にきたのは、二日前の十月五日であった。友人の本田秋彦がいた。本田は牧場をやっていた。肉牛と乳牛の両方である。小さな牧場であった。その本田の牛が罾にやられたのは九月のはじめであった。牧場は森に接して柵囲いしてあった。そこに二百頭近い牛を放していた。罾が柵を押し破って、牛を襲った。罾は殺した成牛を森に引きずり込んで喰い荒していた。

本田は中標津町の猟友会に応援を乞うた。猟友会員の大半は罾対策として害獣駆除の免許を取得している。数人が出動した。

熊には遭遇できなかった。

通りすがりの放浪熊だろうとなった。昔はともかく、最近では根室地方にめつたに熊害はなかった。

九月二十日の朝、また、本田牧場の牛が殺られた。

そのときも猟友会員が追つたが、発見不能に終わった。北守は本田から手紙をもらった。本田は北守がハンティングにこつていたのを知っていた。それに、動物にくわしい森林警備隊員でもあった。休暇がとれるなら、ぜひ、遊びがてらにきてほしいとあった。

熊狩りをしたい気持ちは、北守にはなかった。動物を殺すことに疑義を持つてハンティングをやめてから五年になる。それも、まだ月の輪熊だともいうのならともかく、熊では荷が重すぎる。招きに応じてゴロを連れてやってきたのは、だから、軽い気持ちだった。地元の猟友会員の手に負えない熊に北守が遭遇できるはずはない。まかりまちがって運悪く行き遇うようなことにでもなれば、そのときはそのときで、射殺すればよい。ずぶの素人ではなし、強力なライフルを持っているのだから、なんとかなるだろうと、そんなふう  
に思っていた。

北守はライフルを胸のあたりに持つてきていた。熊

を発見すればすぐに肩つけできる体勢をとっていた。

ゴロは林の中に入っている。高鼻で林の中の気配を嗅いでいた。雑木にエゾ松の混じる樹林は風が西から東に流れていた。西側は林が浅い。奥が深いのは前方である。風が熊のおいを吹き流しているようだった。ゴロはかすかなにおいの粒子をとらえている。一気に踏み込まないのは、相手が生まれてはじめて見参する熊だからであろうか。用心深く高鼻で相手を確認しながら進むゴロの肢体に神経が盛り上がってみえた。筋肉の引きつれではなくて、それは神経の束であった。抜き足さし足で進んでいたゴロが、ふたたび足を停めた。口唇がめくれている。めくれ上がった唇の下に牙が白々と剥き出されていた。低い怒号が放たれた。北守は撃鉄に指をかけた。体全体から血が失せていた。冷たくなっているのが自分でわかる。熊は前方のどこかに潜んでいる。遠い距離ではない。ゴロの動きをみればわかる。これが内地の熊や猪なら、ゴロは一瞬のためらいもなしに突き進んでいる。相手が初見参の熊だから、そして至近距離にいるから、ゴロは用心  
をしている。

銃を持つ腕が硬直していた。北守の脳裡を熊の凶暴



な習性がかすめた。こうして、身動きもせず待ち受けている鰐は、わけても凶悪だという。巨大な凶体を持ちながら、鰐は舌を巻くほど巧妙に雑木に隠れる。隠れるというよりは化けるのだ。突如、小山のような体をあらわして襲いかかる。

鰐を撃ちそこねたとわかったら、つぎの瞬間には横っ跳びに逃げろという。鰐は硝煙のにおい目にかけて突進してくる。そこに切り株か立木があれば鰐は叩き、殴り、咬み裂く。逃げそこねたら、最期だ。

また鰐は人間の走るよりはるかに早く走れる。それらが北守の脳裡を死臭のようにかすめた。

ゴロが動いた。北守の心臓が収縮した。斬られたような気がした。ゴロは体を捻めるように低くしたと思つたつぎの瞬間には、大きく跳躍していた。怒号が高く林に湧き立った。疎林が揺れた。風が呼応して音をたて、枯れ葉がいつせいに散りしいた。その枯れ葉の舞う中を、ゴロが直線に走った。まるで茶褐色の太い槍が走ったようにみえた。

ゴロの怒号を打ち消すように、唸りが湧いた。七、八メートルのところは褐色の小山が湧き出た。小山はゴロを覆った。北守は銃口を鰐の胸につけた。その胸

が消えた。小山はゴロに襲いかかっていた。ゴロを叩いた熊掌が大地に重い音をたてた。ゴロのかん高い悲鳴が湧いた。ゴロは跳びすさつていた。

鰐が北守をみた。金毛だった。黒褐色の鰐のことを俗に金毛という。金毛はとくに性質が狂暴だ。人喰いになるのも金毛だ。体重が百貫を超すのはざらにある。

ふさふさした金毛の凹みの奥に、小さな黒い目が見えた。陰惨な目だ。その目が北守をみた。北守の体を戦慄が走った。撃鉄を絞った。

林をたち割るような発射音が走った。三〇一〇六の大口径銃だ。弾は三百メートルの距離を抛物線を描かず直線に飛んで、その位置でなお一屯のパワーを蔵している。北守はトリガーを絞りながら、鰐の打ち倒れる姿を必死に念じた。

鰐が北守を見、北守が撃つたのは一秒の何十分の一の間の、一瞬のことであった。

そのとき、本田秋彦は北守と数メートル離れた位置にいた。本田も銃の腕に自信があるわけではなかった。ただ、本田は、鰐憎しの一念があった。この鰐を仆さなければ、また牛が殺られる。その憎しみが恐怖をなかば忘れさせていた。

熊がゴロを叩いて、正面の北守に向かった瞬間、本田は発射していた。本田と北守の射撃は同発であった。熊は重い咆哮を放った。放ちながら突進していた。

失中かどうかわからなかった。本田の銃は国産のライフルで自動銃だった。北守に向かつて突進する熊に向けてつづげさまに撃った。撃ちながら、本田は何かの気配を感じた。右に位置する北守の横だった。大きく動くものを、本田の目がとらえた。

本田は悲鳴のような声を走らせた。もう一頭の熊が北守の真横から襲いかかっていた。風下だった。その熊は風下に潜んでいたのだ。熊は体中の毛を膨らませていた。毛を立てると藪を走っても音がしない。毛が消音装置となるのだ。怒って、復讐するときには、そうするときいていた。

北守は本田の絶叫をきいた。右横に山のような熊が立ちはだかっていた。それをみた北守は風圧にはねとばされたように、転んだ。銃は前面の熊に二の矢をかけるべくボルトを操作していた。倒れたまま、その銃を横から襲いかかった熊に向けた。狙う隙はなかった。胸のあたりに向けて撃鉄を絞った。死ぬのだと、北守は悟っていた。前面と真横に熊が迫っていた。双方と

も距離は二メートルとなかった。

北守は熊の怒号を耳もとで聴いた。その前に肩に鉄塊で殴られたような衝撃を受けていた。熊の火のように熱い息が顔を灼いた。目のくらむ悪臭をともなった息だった。

意識が薄れた。

本田はみた。倒れた北守のしかかろうとした熊が倒れた。倒れた北守の放った一弾が急所を射抜いたようだった。地を叩く断末魔の咆哮が林をふるわせた。そのときには前面の熊が迫っていた。本田は六弾を全部撃ち尽くしていた。熊は北守のすぐ手前で横転した。本田は弾を詰めた。ふるえる手がかしかなかった。詰め終わらないうちに、倒れた熊が起き上がった。熊は咆哮を放ちながら、大地を叩きつけた。叩きつけながら北守に這い寄った。熊の熊掌が北守の体を叩いた。血しぶきが走ったのを、本田はみた。

熊は北守に噛みついた。

そのときに何かが熊の喉首に張りついたのを、本田はみた。ゴロだとわかったのは、あとになってであった。熊は北守を離して、太い首を打ち振った。ゴロがはねとんだ。熊は立とうとした。体がよろめいていた。

金毛に血が溢れて滴り落ちていた。本田は、ようやく弾を装填し終えていた。熊の背中に引き金を引きつぱなしで六弾を射込んだ。

死を告げる咆哮が、林をふるわせた。

## 2

北守数重は重傷を受けていた。

肩から胸にかけての肉が熊の爪でむしり取られていた。鎖骨が折れているのがみえた。肋骨も折れているようだった。ほとんど、意識がなかった。口笛を吹くような、細い息をしていた。ひどく苦しそうだった。

本田秋彦はそれをたしかめて、ハンド・トーキーで牧童を呼んだ。救援が駆けつける間、本田は止血などの応急手当をした。止血のしにくいところだった。傷口に当てたシャツや上着はたちまち血を吸ってべとべとになった。

ゴロはその間、北守につきっきりでいた。倒れた二頭の熊は見向きもしなかった。ゴロの体も返り血でべとついていた。

「死ぬなよ！ 北守！」

意識のない北守に本田はことばをかけつづけた。北守が死ねば、それは自分の責任であった。責任などはどうでもよいとして、このまま出血多量で死ぬことを思うと、息が詰まりそうなおびえがあった。

熊狩りなどをすべきでなかった——その悔恨が胸を塞いでいた。熊狩りはもつとも危険なゲームであった。専門の猟師たちにかませるのだった。人間なみの狡猾さがあり、その上、凶暴な熊は素人の手に負える相手ではないのだ。かろうじて闘いには勝つたものの、代償が大きすぎた。

傍につきっきりのゴロを、本田はみた。この犬がいなければ、二人とも確実に熊の餌えさになっていたところだった。待ち伏せている熊ほどおそろしいものはない。しかも、二頭が挟撃態勢で待ち伏せていたのだ。あのとき、ゴロが熊の喉笛に捨て身の攻撃をかけなければ、北守の頭は熊に咬み砕かれていたのだった。

それを思うと、北守を遊びがてらにはいえ、熊狩りに誘った悔恨が深い。

救援がやってきたのは十分ほどたってからであった。牧童が二人、小型トラックを近くまで乗り入れてきた。戸板を持ってきていた。それに北守を乗せてトラック

に運んだ。

本田は荷台に乗って北守を支えた。ゴロを乗せる余裕がなかった。

「ついて来い」

本田はゴロに声をかけた。

トラックは走りはじめた。

牧場には戻らなかつた。道路に出て、そのまま中標津町に向かつた。一刻も早く病院に着かねばならなかつた。

病院では医師が待ち構えていた。

応急措置がとられた。

約三十分後に、本田は医師に呼ばれた。

「肋骨が折れて、片肺を突き破り、肺内に出血しています。肺は陰圧で呼吸をしていますから、破れると洩れぬのです。さいわい、片肺に異常がないからどうか呼吸はしていられるが、早く手当てをしなければ危険です」

顔見知りの老医師の表情に困惑がある。

「どうすれば……」

「ここでは、だめです。帯広の病院に運ばねば。別海べつかいの自衛隊基地にヘリを要請するしかありません」

「でも、先生、途中で……」

「医師を同乗させましょう」

「おねがいします」

「それでは」

老医師は電話で自衛隊に医療出動を要請した。

「すぐに出動してくれるとのことです」

「ありがとうございます」本田は深く頭を下げた。

「北守君は、救かるでしょうね、絶対に。わたしにできることなら……」

「ご心配なく」老医師はおだやかに遮った。「輸血をしました。まず、だいじょうぶです」

そのことばをきいて、本田はやっと生色を取り戻した。

ヘリは二十分後に到着した。

若い医師と本田が同乗して、ヘリは中標津町を飛び立った。ジェットヘリだった。

帯広市に着いたのは、午後二時過ぎであった。救急車が帯広空港に待っていた。

市立病院に着いてすぐに、北守は手術室に運びこまれた。

本田は待つていた。

やがて、手術は成功したと知らされた。

面会は禁止だった。

本田は病院を出て、ホテルに入った。

ホテルで夕食をとっているうちに、本田はふと、ゴロのことを思い出した。あわてて、家に電話をかけてみた。

ゴロは牧場には戻っていないとの返事だった。

本田は電話を切って、あのとときの情景を思い浮かべた。ゴロは小型トラックの後をついてきていた。最初は車はゆっくり走っていた。山野だから揺れがひどい。しかし、道路に出でからはかなりのスピードをだして病院に突っ走った。ゴロは道路までついてきていたのだろうか。

ゴロの姿をみた記憶がなかった。

本田は不安になった。家の者にはゴロが戻れば面倒をみるようにいつてはあるが、もし、このままゴロが姿を消せば、北守が悲しがるのではあるまいか。いや、大好きの間人には、犬もひととも同等にみる者が多い。それを思うと、不安が増した。

しかし、本田はその不安を自分で打ち消した。トラックを追っかけてきたにせよ、見失えばゴロは牧場に

戻ろう。牧場しか、ゴロのたよるところはないのだ。

たとえ二晩でも、ゴロは北守と牧場に泊っている。北守が戻ってくることを考えて牧場に戻るにちがいない。犬のことだ。捜す気になれば牧場を突きとめるくらいは容易にできよう。

そう思った。

翌日、午後北守と面会できた。わずか五分間の面会だった。

「やあ」北守は弱々しく笑った。「だいぶ、世話になつたようだな」

「世話なんて——それどころか、君をこんな目に遇わせてしまつて……」

「その心配なら、ご無用だ。ところで、ゴロは、どうしている」

「そのことだが……」

本田は艱に襲われてからのことを、説明した。

「悪いけど」北守は苦しそうな呼吸をした。「君は、戻つて、ゴロを、捜してくれないか。あいつは、知らない土地で……」

「わかつた。そうしよう。たぶん、もう牧場に戻つてゐると思ふがね。かならず捜しだしておくよ。心配

するな」

「たのむ」

そういう北守の顔には、おびえに似たものが浮いていた。

本田は病室を出た。

暗い表情になっていた。本田は、今朝、自宅に電話を入れて、事情を聴いていた。

ゴロは昨夜、夕刻に牧場に戻ってきた。牧童の一人がそれをみて、皮紐でつないだ。ゴロはおとなしくつなされた。牧童はたっぷり肉をご馳走した。鰐を二頭も倒せたのは大戦果だった。それはゴロの手柄である。ゴロがいなければ北守と本田が喰われていた確率が高いのだ。はじめて鰐と遭遇したにもかかわらず、主人の危急を知って喉笛に喰らいついたのは立派の一語に尽きる。鰐狩り専門のアイヌ犬にもできないことだ。牧童はゴロの働きに感動していたのだった。

ゴロは飯を食って、眠った。昼間の疲れが出たのか、蹲って、目を閉じていた。

未明に牧童は起きた。

ゴロはいなかった。皮紐が咬み切られていた。

そう、報告を受けていた。

徹底的に捜せ——本田は電話で命じてあった。

空港に向かった。

中標津空港に着いたのは、夕刻だった。

牧童が車で迎えに出ていた。

その牧童の話では、警察や保健所などには連絡済みだという。町の印刷屋に犬を捜すピラも発注した。そうしながら、車で計根別から中標津一帯を走り回ったが、姿はみかけなかった。

「飼い主が死んだと思つて、東京まで戻る気では……」  
「まさか」

本田は否定した。犬だから、飼い主が死ぬか生きるかくらいは本能で嗅ぎ分けよう。かりに嗅げないにしろ、ところで、飛行機で運ばれたゴロに方角のわかるわけはない。

——捜しに出たのだ。夜になれば戻る。そうとしか、考えられなかった。

しかし、ゴロは二度と牧場には戻ってこなかった。

海から戻った永山雄吉は、海岸にある掘立小舎の板戸を開けた。

小さな、暗い小舎である。五坪ほどの広さしかない。もとは漁具小舎であったのを、永山が住むことになつて床を張つたのだつた。なかば、朽ちている。冬の風が板張り壁の隙間に号くと、悲しい。

板戸を開けた永山は暗い内部に目を馴らした。床の隅に黒々と蹲っているものがある。隙間から洩れ込む淡い光がそれを縞模様<sup>な</sup>に切つていた。

「おい、ゴロ、どうだ。元気になつたか」

永山は声をかけた。

黒い塊が動いた。立って、永山を迎えた。尾が動いている。永山は窓を開けた。

犬の目が永山を見上げていた。切れ長の眸<sup>まなこ</sup>だった。ふつう犬の眸は茶褐色である。俗に鶯色という。この犬の目は青くみえた。瞳孔は黒褐色だが、その周辺が淡い水色を思わせた。それだけ、きつい双眸<sup>まなこ</sup>だといえる。永山はゴロの頭をなでておいて、船からもらつてき

た魚を料理にかかった。

犬には首輪があつた。首輪にゴロと刻んであつた。たぶん、その犬の名であろうと永山は思った。ゴロと呼んでみると、かすかに尾を動かした。

ゴロと永山が知り合つたのは、四日前の十月十二日であつた。夕刻、一頭の犬が浜辺にやつてきた。そのとき、永山は味噌汁に入れる海藻を拾いに海に出ていた。荒漠とした海辺であつた。厚岸<sup>アサギ</sup>湾の半島の外側にある去来<sup>きこ</sup>牛という小さな村だ。太平洋に呑まれ落ちそうにみえる。道らしい道もない。

その犬は痩せ衰えていた。よろめきながら、それでも一歩、一歩、ゆっくり、砂を踏みしめて渚<sup>しづみ</sup>にやつてきた。近くに立っている永山は目に入らないようだった。海水を飲みはじめた。しばらく海水を飲んで、引き返した。だが、体力がそこで尽きたようだった。渚の固い砂に尻が落ちた。何度か立ちあがろうとしたが、そのたびによろめいてくずおれた。

犬は諦めたように横たわつて、目を閉じた。肋骨の浮き出た腹がかすかに動いている。

永山は傍に寄つた。犬は青くみえる双眸<sup>まなこ</sup>で、永山を見上げた。救いを乞う眸<sup>まなこ</sup>ではなかつた。牙えさえとし

ていた。運命の尽きたことを悟った色にみえた。

永山は、しばらくみていた。ふっと、哀れをもよおした。犬を、老齢だろうと永山は思っていた。だが、そうではなかった。みたところ、三、四歳かそこらにみえた。犬の三、四歳は人間の三十から四十にあたる壮年に入ったばかりである。

永山は自分のことを思った。この犬よりは歳をとっているかもしれないが、それでも三十八歳であった。落ちぶれるというのはあたらぬ。事情があつて東京を出たのだった。人目を忍んで、彷徨い、流れ流れてここに来たのが、三月前であった。

犬の首輪には鑑札があつた。その鑑札には東京都目黒区とあつた。なぜ、東京の犬がこのさいはての海辺で死のうとしているのか。犬には犬の事情があるのであるが、永山はさみしかつた。似た者同士だという気がした。

永山は犬を抱えあげた。犬はわずかに牙を剝いたが、逆らひはしなかつた。まるで風船のように軽かつた。その軽い体が、熱かつた。熱があるようだった。

小舎に運び込んで、粥を煮て与えた。犬はすこし舐めた。

ゴロは急速に回復しはじめた。

永山は毛蟹漁の船に雇われていた。雇われているといつても賃金をもらうのではなく、小舎を貸してもらい、食糧をもらうだけであつた。蟹漁は七月から十月が漁期であつた。刺し網を使つてとる。夜半の一、二時に出港して、朝の九時頃に帰港する。

翌日、小舎に戻つてみたら、ゴロは歩けるようになっていた。置いてあつた魚入りの粥はきれいに食べてあつた。

その日、永山は小舎の板戸の下部を切り抜いて、布のカーテンをつけた。ゴロが自由に出入りできるようにした。そんなことをしても、元氣になれば、ゴロは出発するかもしれないと思つたが、それならそれでよかつた。だれにも目的地はある。ひとも動物も最終の目的に向かつて生きてゆくのだ。

しかし、ゴロは出て行かなかつた。三日目になると、多少は走れるまでに回復していた。漁から戻つて飯を与え、渚に散歩に連れだした。はしやぎはしないが、さりとて嬉しくないという風情ではなかつた。永山の後先になりながら、ときに永山が駆けてみせると、同じについてきた。永山の胸に一つの灯がついた。暗く



閉ざされていた心にはのかに暖い灯がともって、体にその暖かさがにじむのをおぼえた。

毛蟹漁期は残りわずかだった。それが終わればカイ漁がはじまる。十一月からはスケソウ漁もはじまるときいていた。そのいづれも沿岸三カイリから十二カイリあたりまで出漁する。いまはまだなんとかなるが、十一月に入って荒天のつづく北海での操業に体が耐えられるとは思えなかった。ちょっと海が荒れると船酔いはじまるのだった。五屯ほどの漁船は足腰が立たないほどに揺れる。そうなると永山は船の隅に小さくなつて横たわった。雇い主は別に文句はいわなかった。むしろ気の毒そうな表情で永山をみる。

沖で働けない分を、永山は港に戻って働いた。船の掃除や、その他の雑用である。自分からたのみ込んで無給で働かしてもらっているのだが、永山自身、給金のもらえざるほどの仕事をしているとは思わなかった。ときに漁夫たちの邪魔をしているような気にさえなる。小舎に寝起きさせてもらい、食べさせてもらっていることが、身を切るように辛く感じられる。

この辺境の村を立ち去るべきときがきたのだと思っていた。

そんなときに知り合ったゴロだった。

食事の支度をしながら、永山は、ゴロの境遇を想像した。北海道の犬に東京都の首輪があるわけではない。ゴロは何かの事情で飼い主に北海道に連れてこられたのだと思った。そして、捨てられるか、はぐれるかした。たぶん、はぐれたのではあるまいかと思う。捨てるのなら、登録番号のわかる首輪は外そう。

どこではぐれたのかは、推察するしかないが、この厚岸ではあるまい。もっと遠い、たとえば知床あたりか、あるいは網走、紋別のあたりであろうと思った。動物には帰巢本能がある。犬にはとくにそれが強いときいたことがある。目隠しをしてグルグルと回り道をして遠隔地に運ばれても、犬は二、三十分から一時間ほどそこらあたりを走り回った末に、自分の家のある方角を割り出す。あとは本能に導かれるままに、旅に立つ。

ゴロの瘦せぐあいを見れば、ゴロが遠隔地からこの厚岸の寒村に辿りついたことがわかる。おそらく、喰うや喰わずで、必死に南を目ざして下ってきたのだ。

ゴロは東京を目ざしているものと、永山は思った。  
強烈な本能だといえた。